

2021年度 ドコモ市民活動団体助成事業 活動成果報告書			2022/9/29
団体名	名護こども食堂	活動タイトル	経済的困難を抱える子供の支援、子ども食堂(連携による学習支援ネットワーク構築)
望ましい社会状況および団体のビジョン（社会的役割と活動基盤）			■ 活動風景
●地域の望ましい社会状況(ビジョン)	大学－民間企業－名護こども食堂－自治体－公立学校協力校からなるコンソーシアムを構築することで… 名護の相対的貧困を減少させる＝学力の向上、こども達の未来の可能性拡大させそれにより、自己実現能力/自己肯定感/自己管理ができるようになる。 学生ボランティアにより、憧れとなるロールモデル作りを行う。 自走可能な居場所作りのお手本となる。 企業参画によりCSR/SDG'sに繋がるよう企業の具体的支援を明確化にし、より多くの地域企業が関われる環境を創り上げる		学生ボランティアと地域の課題解決に取り組む子ども達。それぞれのパートに分かれて取り組んでいる様子
●団体の社会的役割（ミッション）	スクールソーシャルワーカーと連携したこどもの見守り事業を実施している。 来た子ども達へ食事の提供を実施している。 子供達の体に痣などできていないか、言動に不自然なところはないか？等週1回のこども達とのコミュニケーションにより見守りを実施。 子供たちの様子などは、スクールソーシャルワーカーへ連絡し、問題があれば、児相・警察・学校などと連携してもらうという役割を担っている		
●団体の活動基盤	●望ましい人的資源：大学コンソーシアム沖縄との連携により、学生ボランティアの確保を行う。また、地域の企業よりボランティアへ参画いただき、地域貢献として活動をサポートしてもらう。 ●望ましい物的資源：地域の字公民館などへ理解をいただき、支援を必要とする地域のこども達のサポートを依頼する。また、地域企業と連携し、米や調味料、具材などの提供をいただき、物資の支援を行える環境を構築する。 ●望ましい活動資金：公的資金に頼ることなく、地域のこどもは地域で育て居るというモットーのもと、地域の募金や企業からの支援金、資金造成のイベントなどを実施する。 ●望ましい情報：HP開設・管理 / SNSの実施 適宜情報をアップデートする。		
■ 活動報告		■ 1年間の目標に対する達成状況(まとめ)	
・オンラインとリアルなハイブリッド学習支援構築 子ども達をサポートする学生側の学びも進み、東京から夏休みのインターンを利用して直接子ども達と触れ合うなどの機会を創出できたことでコミュニケーションが図れ、学生が東京へ戻っても良好な関係が構築されていた。 リアル場でサポートする学生もオンラインでサポートしにくい細かな表情などに注視し、涙み取り、進捗に合わせた確認を行うことができるようになった。		・オンラインとリアルなハイブリッド学習支援構築 iPadの購入台数が予定より少ない台数となり、当初の目標数を揃えることができなかった（半導体不足・メーカーの部品調達がコロナでうまくいかない）。結果予算内で収まる範囲の上位機種を購入し実践に入った。オンラインの環境は問題なく整ったことで、東京－沖縄間の連携構築がよりスムーズになったが、機材の台数が不足していたため、表情などを映すことができず、リアル場でのサポートがより重要な役割を担うことになった。 子ども達との関係構築もオンラインでプロアクティブに取り組み、サポートをリアル場でしっかり行うことで、子どもの表情や感情的な部分も含めて、次回はどう改善し、実践するかアクションプランを立て継続した取り組みを行うことができるようになった。	
・学生の支援方法のルーティン化 当初は、グループでフィードバックすることが多かったが、できる限り教えたことのある子ども達と連続して長く関係を構築するために学習支援の際、同じ学生をアサインするように工夫をした。それにより、個別の振り返りが多くなり、内容も個々人ごとに行えるようになった。		・学生の支援方法のルーティン化 学習支援終了後に即時担当ごとにFBをオンラインで行うことで、今日の良かった点、改善できる点を忘れることなく確認しあえる環境が整った。子ども達と対話したことを共有し、子ども達に問いかけ、自発的な考えを促せる視点で捉え、子ども達自身に決定してもらうプロセスを考えて行動できるように取り組めている。	
・問題解決型学習（プロジェクトベースドラニング-PBL-）の実践 地域の資源を活用し、地域の企業・団体の困りごとを子ども達と解決する取り組みを実践した。勝山シークワサーの出荷できないけど食べられる実や破棄されていた皮の部分などをアップサイクルする取り組みを先ず行った。 継続的に地域の廃棄やダウンサイクルされているものを活用した子ども達との取り組みをSNSなどを通じて配信した。 答えが決まっていないものあるは、複数正解がある中で、子ども達が学生や地域の方々と課題を見つけ、その課題を解決するまでの過程でさまざまな知識を得ることができた。		・問題解決型学習（プロジェクトベースドラニング-PBL-）の実践 そもそもPBLという概念がない状態からスタートし、地域の課題解決を地域に問い、地域の方が子ども達と一緒に学習しようとこども食堂に集まり、子ども達と一緒に考える環境が出来上がったのは、大きな収穫とらえている。	
・PBLによる地域文化を生かした学習→PLBにより生まれたものを社会実装（自走に向けた取り組み）に変更 問題解決型の学習（地域の課題解決）を子ども達と取り組んでいた際にできたシークワサーのジャムを発展させ、東京と沖縄の食堂などで、スイーツを売り出す運びとなった。社会実装され、お客様の感想などを聞くことができ、達成感を得ることができた。自分たちが考案したアイデアが実装され、ある人の喜びにつながる初めての体験ができた。		・PLBにより生まれたものを社会実装（自走に向けた取り組み）する 子ども達が生み出した地域の特産品と使ったスイーツが実際に販売され、お客様の美味しいを引き出せた経験は過去になく、子ども達がお客様に楽しんでもらうという価値観（嬉しさ・喜び）に気づけたと考えている。アンケート調査にも「取り組みが役に立っている」「もっと深く学びたい」「自分の将来に役に立つ」と取組前より取組後の気持ちの変化がポジティブ表れていた。	
■ 事業を通じて得られたノウハウ		■ 望ましい社会状況を達成するための課題	
・オンラインとリアルなハイブリッド型支援における、スタッフ間の連携やツールを活用した関わり方に関するノウハウが蓄積された。 ・PBLを通じて地域課題解決に取り組むことの有効性を確認できた。今後も継続して取り組み続ける。 ・社会実装が子どもたちにとってもポジティブに受け止められているので、今後も商品化に取り組みたい。 ・商品化されるまでのプロセスで地域の方々とのかわりが増えるので、地域の巻き込み方が理解できた。 ・大学連携を行うことで、見落としがちな子ども達との接し方やプロセス、特に「対話を通じて相手の成長を実現するプロセスの大切さ」を学び実践できた。 ・傾聴や質問は手段に過ぎず、商品化に至り、子ども達の気持ちや行動の変化を見出すが大切で、接し方などを学生と一緒に学ぶことができた。 ・今までのボランティアとの活動では、どこから手を付けてよいかわからず戸惑っていたが、提案することも大切なプロセスの一つであることを学び実践することができた。 ・現状の理解→目標の設定→目的の確認という流れを確認し実践することで、成長実感につなげることができた。 ・現状と目標の間の差分が成長課題と位置付けて行動できるようになった。 ・子ども達との取り組みを機能させるために①子どもの精神状態②子どもの成長段階③子どもの課題領域 に目を向けたアクションプランを構築できるようになった。		名護地域の子ども達は、「貧困」を起因としたさまざまな問題を抱えている。地域の子どもの貧困問題は、子どもたちの「いま」に留まらず、「これから」を思い描いたり、チャレンジする機会を失わせたりする要因にもっており、その中で子ども達の夢中になれるものを探すという大きな課題であった。 夢中になる子ども達は、努力や根性とは無縁の行動を行うことができ、それを学習と捉え、子ども達の「やりたいこと」をテーマに取り組むアクションを実施した。 取り組む中で見えてきた更なる課題としては、「継続した取り組みを行う上での原資をどうするか？」である。 助成金等の外部資金を活用し続けるのではなく、自走するためには相応の投資と地域連携が必要となるが、今回の取り組みでは、『地域課題解決への取り組み→解決の為の社会実装→収益を出すモデルづくり→子ども達の取り組みに還元する十分な原資の調達』というサイクルを確立するまでに至らなかった。 子ども達の取り組むべき課題と行動までは実践できているので、その先の利益を出すモデルづくりに取り組み続けます。	
この1年間の活動を通じて		子ども達が自分で決定できる環境を作り上げ、行動する環境づくり	を達成しました。
■ 受益者の具体的な変化（自由記入）			
子ども達：学習に対する取り組みが楽しいと答える子ども達がアンケートの結果で増えているのを確認することができた。学習＝勉強ではなく、学習＝自分の成長と捉えることができた取り組みになっていたとらえている。 学生ボランティア：			